悪意ある読者
余華「偶然事件」を読む

石井恵美子

1　小説の概要

9月5日、峡谷珈琲館の気だるい雰囲気のなかでその殺人事件は起こった。疲れきった様子の男が髪をきれいに撫でつけた男を刺す。刺した男は慌てることなく警官を呼びにいき、居合わせた人々はあまりの事に呆然としていた。警官に目撃したことを聞かれ、身分証明書を見せ、ようやく解放される・・・。

余華の「偶然事件（アクシデント）」（『長城』1990年1月号、『偶然事件』花城出版社、1991年所収）はこうして始まる。人妻の浮気相手らしい男、その密会を見つめる夫、身分証明書が取り違えられたことにより始まるふたりの男の手紙のやり取り、そして第二の殺人が起こる。いかにも推理小説らしい体裁を、この小説は備えている。読み手はつい作者が余華だということを忘れ、「推理小説」を読む態勢になる。小説は始まりと終わりに同じ珈琲館で殺人事件が起こり、間にその殺人と関係するらしい事柄が挟まれる。しかし、はっきりたどれる筋はなく、さらに後述するような仕掛が施されるため、何が関係するのか何がしないのかわかりにくい筋立てになっている。というより確かなものは何もない状況が作り出されているというべきだろう。そのため内容を紹介するのが難しいのだが、以下私なりに整理してみたい。小説にならって日付により区切っておく。

9月5日、第一の殺人が起こる。この様子は冒頭に述べた。この節は、殺人犯が警官に連行された後、次のような描写でおわっている。（以下／は改行を、・・・は省略を、（　）は石井注を示す。）

> ひとりの警官はカメラで現場を撮影した。もうひとりの警官はそのふたりの男に身分証明書を見せるように言い、彼らの氏名、住所を紙に書いてから、彼らに返した。警官は言った。／「必要な時は連絡しますから。」／そしていま、この警官はこちらにやってきた。

9月10日、硯池アパートで彼と彼女は逢い引きをしている。彼女は窓の外に夫の姿を認める。陳河は通りでひとりの女を見かけ、妻に似ていると思う。女

は手紙をポストにいれ、陳河も「峡谷に関係のある手紙」を出す。

9月11日、彼女は初めて彼の部屋に来て緊張している。彼の口説きの最中に郵便配達が来る。

> 彼は手紙を机に放りなげた。／彼女は顔を両手で覆い、体を震わせている。／すべてまたはじめからやり直しだ。彼が両手で彼女の頬を捧げるようにすると、彼女の手は顔から滑り落ちて、胸に置かれた。彼が口づけると、彼女の唇は既に感覚をなくしていた。これはもうひとつの不安。／彼女は顔をそむけて彼の唇をかわすとこう言った。／「だめだわ。」／彼は立ちあがり、ベッドの縁に腰をおろした。彼がたずねる。「何か飲む？」／彼女は首をふった。「夫がたずねて来るようですごく気になるの。」／「ありえないよ。」／「いいえ、彼はきっと来るわ。」

続いて陳河から江飄への手紙と江飄の返事、陳河の二通目の手紙の描写。この中で、ふたりの身分証明書を警察が取り違えて返したこと、陳河からの珈琲館の殺人を推理する誘いが語られる。

9月29日、彼と彼女はレストランにいる。外の通りから陳河が見ている。陳河から江飄への返事を促す手紙。

10月8日、江飄の部屋。三十歳位の女と二十四、五歳の女がかち合う。前者は怒って帰り、江飄は以前にもこんなことがあったと思う。陳河と江飄の手紙のやり取り（計七通）の中で、事件の原因は妻の浮気にあるという陳と、男と女は快楽のために付き合うのであり事件とは関係ないだろうという江。

11月3日、彼は胡同の入り口まで彼女を迎えにいく。彼の足がふるえている。彼女がカーテンがないのを嫌がると、彼はシーツをカーテンがわりに掛けようとする。

11月5日、江飄と若い女が公園にいる。女が独身とわかると江は帰ってしまう。陳河と江飄の手紙、計六通。陳が犯人は妻の浮気相手を殺したのだと推理し、江がその説の矛盾を指摘。

11月23日、陳河と女が店でビールを飲んでいる。口説こうとするが女は帰ってしまう。陳河と江飄の手紙、計八通。前回とは逆に、犯人は珈琲館で偶然浮気相手を見つけたための犯行ではなかったかと江が推理。陳の申し出により12月3日に峡谷珈琲館で会うことになる。

12月3日、峡谷珈琲館。斜め向かいにジャケットを着た男が座り、その正面に元気のない男が座っている。最初の場面と同じ組み合わせである。ふたりの間に次のような会話があり、その後ジャケットの男が刺された。

「ここの雰囲気になじめないようだね。」／「まあまあですよ。これはなんていう曲かな？」／隣の席のふたりが話している。もうひとりのウェイトレスがこの時ここに微笑みを向けた。彼女はいつもそうするがいつも何も得られない。彼女はもういい、窓の外を見よう、また木の葉が一枚ひらひらと落ち、人がひとり通り過ぎた。／「あなたの手紙はすばらしかった。」／「それはどうも。」／「あなたの手紙で多くのことがわかった。」／「病気じゃないのか？顔色が真っ青だ。」／マスターは体をひねって、テープレコーダーのボタンを押し、女の声はすぐに止んだ。彼はカセットを入れ換える。『ジミー、おいでよ。』（曲名）／「なにをじろじろ見てるんだ。」／「峡谷」に悲鳴が響き・・・

そして元気のない男が警官を呼びにいくところで小説は終わっている。

以上、小説をざっとたどってみた。このわかりにくい小説を読み進めるための手がかりとして、次の三つに注目したいと思う。手紙、三人称、視線である。

2　手紙（警告としての）

陳河と江飄の手紙は小説の約半分を占めている。句読点が極度に少ない、偏執的な手紙の中で、陳河は自分達が目撃した殺人を推理しようと働きかける。彼の考えた動機は犯人の妻の浮気にあり、相手の男に何度も警告したのに付き合いを止めなかったから刺したのだという。江飄は最初はいいかげんな返事を書いているが、後半になると陳河の説の疑問点を指摘しはじめ、手紙の往復の後、二人の間にひとつの仮説――妻が複数の男と浮気しつづけるのに怒り、絶望した夫が、珈琲館で会った男が妻の浮気相手だと偶然知り、かねてからポケットに忍ばせていたナイフでその男を刺した――ができあがっていく。手紙のやり取りは、陳河が積極的に進めるのだが、そこでは陳河自身も妻の浮気に悩んでいるらしいこと、江飄は独身だが女性（達）と付き合っていること、陳は妻を愛しているが江は女を快楽の対象とだけみていることなどが綴られる。そして、陳河は偶然江飄に手紙をだしたのではなく、彼が妻の浮気相手だと確信し、手紙で夫の心情を知らせることによって警告しているらしいのだ。その間も陳河は妻らしい女を尾行し、自分も女の子を口説いて失敗したりもする。そして、妻の浮気相手がひとりとは限らない、ひとりなら女は離婚してその男のもとに走りたがるものだという江飄の言葉に乗せられるようにして、浮気相手をすべて殺せないならば、せめてひとりでも相打ちにできれば憎しみは解消す

ると考えるようになる。彼は１２月３日に江飄と会う約束をする。第二の殺人はこうして起きた。

3　三人称（彼と彼女）

この小説には多くの彼と彼女が登場する。たとえば９月11日の節では、彼、彼女の密会の描写（引用部分）の後、陳河の江飄宛の手紙が描写されるので、彼＝江飄だと思いやすい。仮にそのように「彼」は江飄または陳河、「彼女」は陳河の妻または彼らの付き合う女と想定していくと、珈琲館で起こった第二の殺人事件は、妻の浮気に悩み抜いた男（陳河）が手紙で浮気相手である江飄に警告し、画策し、予告した必然的殺人であるようにみえる。そうだとすればふたりの男による単純明快な筋書きである。しかし、ふたりだけで進められるようにみえるこの小説の特徴のひとつは三人称の多用による人物の不確定性にある。彼、彼女は全編にわたり登場するが、すべて同じ人物とは考えにくい。彼のなかには女に不慣れな男もいる。彼女の夫が陰から見ている時も、見ていない時もある。彼には江飄と、陳河と、陳河の妻の相手と少なくとも三つ以上のバリエーションがあると思われる。手紙の前後に描写される彼が、容易に手紙の主（江飄と陳河）と混同され得るよう構成されてもいる。だが、彼と彼女は特定の人物だけに限定されない、浮気をする男女達の退廃的な雰囲気をうつしているといえるのではないだろうか。

最初の事件の時殺人を目撃した客も、実は三人ではなく四人いたのである。第二の事件で殺されたのは江飄ではない。ふたりが手紙をやり取りする中、陳河は先方を、珈琲館で向かいに座っていたジャケットの男と想定しているが、途中で江飄はあの時自分はワイシャツを着ていたと書いている。冒頭の珈琲館の場面では、最初の殺人の犯人と被害者のほかに元気のない男（陳河）、ジャケットの男、そして白いシャツの男の三人がでてくる。しかし、もっと詳しく読めば、「ここ（這里）」で示されている男が存在し、この男の視線を通して白いシャツの男も含めた珈琲館の内部が描写されていることがわかる。この最初と最後に共通して登場する視線のみの男が江飄であり、陳河の身分証明書は彼と取り違えられたと考えられる。先に引用した９月５日の場面において、警官が氏名などを尋ねたふたりの男が陳河とジャケットの男だとみなせないわけではないが、むしろこれは白いシャツの男とジャケットの男であり、「こちらにやってきた」後に二組目として「ここ」と陳河が事情聴取を受けたとしたほうがつじつまが合うのではないか。とすれば、江飄は最初の手紙を受け取った時点で、陳河の人違いに気づいたはずである。なぜそのままにしておいたのだ

ろうか。

4　手紙（顔の見えない媒体としての）

先にみたように、江飄は陳河の手紙に対し最初は消極的だが、次第に疑問点を指摘したり、自説を披露したりするようになる。犯人の妻の浮気相手は複数ではないか、犯人が逃げなかったのはなぜか、ナイフはどこに隠していたのかなどの疑問を投げかける。そして珈琲館での偶然の出会いによる殺人説（前述）にむかう時点でこう書くに至る。「僕のように分析するのは御都合主義すぎるかもしれない。君もそう思うだろう。だが実は偶然の一致はどこにでも転がっている。偶然の一致はいったん事実になってしまえば誰も驚かず、ふつうのことだと感じるに違いないんだ。」（19番目の手紙）「彼（犯人）にとって、一番大事なのは自分がもうこれ以上耐えられない憤りをどう解決するか、これが肝心なんだ。殺人はこの時にはひとつの手段にしかすぎない、そうなると誰を殺したっておんなじだ。」（23番目の手紙）これらの言葉が陳河の殺人を誘ったともいえるのである。浮気相手と文通しているつもりの陳河は、相手が気づくかどうかはともかくとして、すでに警告は発したと受け取る。だが、前節で述べたように陳河は手紙を出す相手を間違えている。とすれば、江飄の行為の裏には勘違いを利用した見知らぬ人間の悪意がうごめいているのがみてとれるだろう。殺人を画策し、予告したのは陳河ではなく、手紙の中で巧妙に彼を誘導していった人物、江飄である。江飄は名前は知れても顔は知られない手紙という媒体に隠れたまま、当日も期待をもって現場にやってくる。

そして偶然で始まった一連の出来事は、偶然で幕を閉じる。陳河が文通相手と珈琲館で会おうと約束したその日、珈琲館の常連だったのかもしれないジャケットの男も、前回と同じ席に座っていた。「ここ」で示される男の斜め向かいに。

5　視線（「ここ」という男）

この小説には前述したように名前や三人称などで登場する人物の他に、もうひとり「ここ」で示される男がいると考えられ、その男は珈琲館での視線の役割を担っている。この男を私は江飄と仮定しているが、それに関する描写は前述した９月５日の警官の事情聴取の場面にみえる「こちら」、12月３日の場面での「ここ」、そして次に引用するような「ここ」にみられる。

カウンターのなかのウェイトレスはここに流し目を送りだした。彼女が何を期待しているか一目瞭然だ。男の中に身をおいていても、女には寂しくてたまらない時があるものなのだ。『たぶん冬に』（曲名）男が傷ついた時もどうしていいかわからなくなる。ウェイトレスの眼差しがここを離れていく、ここに情熱を向けても何も得られないとわかったのかもしれない。（9月5日）

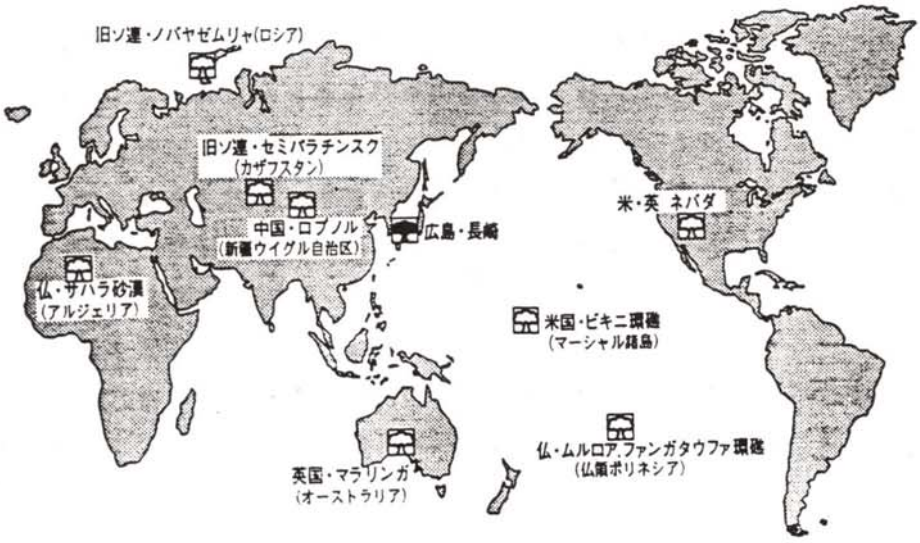
ふたりのウェイトレスは彼（マスター）の右に立ち、眼差しは同時にここに向けられた。なにをからかってるんだ？ここにはなにもないぞ。（12月3日）

珈琲館にあらわれる「ここ」は悠然と外を見たり、ウェイトレスの流し目を受けたりしながら、おしゃべりを続ける。「ここ」は殺人を含めた一部始終を平然とただ見ていた。彼は終始、殺人者と被害者にとって見知らぬ他人だった。だが、この他人は陳河の動機を知り、手紙で陳河を挑発する。手紙を受け取ったのも、陳河が挑発に乗ってきたのも、ジャケットの男が珈琲館に居たのも偶然だったが、思いがけない展開におそらく胸をはずませもしながら、隣の席で見守っているのだ。見知らぬ他人の悪意が小説の底に流れている。

小説全体を振り返り、そこに描かれた暖かみのまるでない男女の関係、手紙という媒体の不透明さ、嫉妬に狂った男が招く悲劇、そして他人の悪意を考えていくと、都市に生きる人間の病理を描いているといえるだろう。推理小説として読み進めていっても、偶然と必然の奇妙なバランスのうえに展開していく事件の底に、信頼を失った人間関係、精神的病態を見いだすことができる。ここには余華の小説に特有の、価値が相対化され、ねじれた世界があるといっていいだろう。しかし推理とみても病理とみても、事件の傍観者を「ここ」という視線であらわさず、隠しておいたとしても十分成り立つのではなかろうか。

冒頭で述べたように、小説があまりにも推理小説としての条件を整えているため、「ここ」の登場に一瞬戸惑っても、読み手はサスペンスへの興味にすぐ戻ってしまう。そしてほとんど気づかないうちに読み手は「ここ」の視線と同一化していく。珈琲館でのふたつの殺人を、私たちは「ここ」の目を通して認識し、続く三人称の入り乱れる人物の行動、ふたりの手紙のやり取りを、その視線のまま見ていくことになる。手紙の中ではふたりの旺盛な推理欲によって事件の仮説が語られるが、読み手はふたりのその推理に参加して、自分なりの事件の構成を、修正しながら作っていく。そして、登場するふたりとは違う、独自の推理を完成する。もちろん、これは推理小説を読む場合、ごく当たり前

の手続きである。その推理と探偵の解説とを照らし合わせて、当たったとか、はずれたとか、この描写法はフェアではないとか考えるわけである。「偶然事件」は、このような推理小説を読む際の枠組みを読み手に用意させておくところに、さらなる仕掛けがある。推理小説のなかでなら、私たちは登場人物の私生活におおいに関心を寄せ、怪しいと断言し、おおっぴらに事件を待望できる。珈琲館での「ここ」と同じように。「ここにはなにもないぞ」と言い張り、ウェイトレスの誘いにも動じず、まったく動かないで視線のみに徹している「ここ」は、まるで壁のレリーフのようだ。これは小説を読んでいるときの私たちの位置――自分の身に直接ふりかからないが、すべてを「見る」ことができる――を想像させる。視線のみに徹している「ここ」は、この時江飄の性格を越えて、それを読んでいる読者の目となっているのである。そして江飄の悪意は私たちのそれに重なる。この小説には読者が不可欠の要素であり、推理小説の枠組みはそのために最大限利用されている。一見ふたりの男の妻の浮気をめぐる単純な殺人事件と思われる構成は、陳河が手紙を出す相手を勘違いしたのがわかった時点で江飄という他人が絡むことになり、珈琲館に再度ジャケットの男が現れた時点で江飄の視線が意味を持つことになり、さらにその視線に同一化している読者が浮かび上がってくるという多重構造になっているといえよう。

「偶然事件」において、余華は推理小説の枠組みを固めて読者を巻き込んだうえで、その枠組みを少しずらすことによって、江飄と同様、私たちのなかにも潜んでいる覗き趣味、自分に関係ないとわかれば騒ぎを期待する一種の悪意をとりだしてみせる。偶然に依り掛かりながら事件を期待する「ここ」は悪意のある読者＝「あなた」ではないのだろうか。

核保有国各実験地一覧（広島・長崎は被爆地）